



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」はその証言館です。

新刊紹介

○薩摩から江戸へ
—篤姫の辿った道—
半田隆夫



去る2月3日、『郷土の今昔』出版企画会議に招かれ、監修役の半田先生とお会いした折、近著を紹介され頂いた。海鳥社からの出版。去年のNHK大河ドラマ「篤姫」は大変な人気を呼び、薩摩への観

光客はどっとふえたという話も聞いた。私自身も用件があつての旅ではあったが、生家という「今和泉家」跡まで足を伸ばした。小学校庭跡にある「手水鉢」など、「幼ない頃の篤姫さんが使ったものです」と篤姫観光おばさまの懇切なガイドが印象に残っている。鹿児島では、宮尾登美子原作を中心に「篤姫」講座設置、そこでの学習成果がガイド役となってお働きのよしも拝聴した。この本の発刊は去年12月、今少し早く出されたらもっと売れたのではないかとひもどきながらの印象。しかし、江戸参府ルート、街道、宿場から読みとられる江戸の時代相がよく伺われる労作、そして考証に添えられた写真等の資料が豊富で、いろいろな視点から読みとられて楽しく読める史書物語である。 (椎窓 猛)

新刊紹介

○わがたましひの故郷は
詠帰会七周年記念誌
NO47号で紹介した冊誌『知恵と正義と友情』の贈呈者黒木久夫さんより『Ya』へのお礼にと、この記念誌を頂いた。詠帰会とは、一高寮歌を懐旧する同窓会と察知されるが、「嗚呼、玉杯……」ほかに時代の推移と共に寮歌も変遷、総数300に達しているとは……この一冊を贈られて初めて知った。時代の推移



と寮歌の作詞、作曲者などが編まれたらと随想を読みながら思いを寄せた。

会員随想では、前田彰氏の文章に注目したのでここにその一部を紹介したい。

一矢内原忠雄初代教養学部長が教養学科を作られ、養老孟司先生が「教養とは人の心が分かる心であり、生涯学習の課題である」と言っておられるが、私達は貴重な青春時代に教養学部で、教養を尊重する教育を受け、常に教養を習得するように習慣付けられたことは真に有難いことであった。」前田さんは岐阜大垣南高のご出身とは判るがどんなお仕事をなされたお方とは判らない。

この一冊の贈呈者黒木久夫さんに私がお願いしたいことは、西村心華さんのエピソードに、クラス担任安藤熙先生についてエッセーを書いていただき、われらが人生史サークル会誌『黄櫨』に掲載できたら……いいなあと思っています。 (椎窓 猛)

受贈図書紹介 37

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。
あしからずご了承下さい。

法の花暦 湯川 久子 福岡市
機関車に片思い 宇都宮照信
ママからの伝言ゆりちかへ ... テレニン晃子
私は早くC型肝炎からさよならしたい ... 福田衣里子

外を見るひと 梅田智江・谷内修三
歌集福耳 古賀ひで子 柳川市
坂東寺史 宮田 智 筑後市
月子 原田 暎子
シルクロード 秋吉久紀夫
そぞろおもい 中原 澄子



○句集 花信

岡部 六弥太

繁二郎の馬の絵句ふ初明り
寂寞と一茶の国の梅の花
雪溪が明けて逆立つ八重桜
山笠昇くや「おいさ」寸分狂ひなし
オホーツクの没日を追へり渡り鳥
菩提樹の花の恵みに蜂動く
八十は長寿と言はむか菊脛

弦書房刊

○風光る八女美しきものとの出会い

金ヶ江 悦子

『風光る八女県(あがた)よ、許せかし古代の善き語部...』田中博さんの小説『筑紫の磐井』の巻頭言の節を借りての表題。金ヶ江さんの生涯スポーツ活動人生録ともいえるまさな光る。金ヶ江さんは昭和59年に八女市体育指導委員を拝命、四世紀半にわたる活動が要約されている。なかでも警告の一章も言える所をここに紹介しておきたい。「次代を担う子ども」の問題点。(1)睡眠と食育。早寝早起きに運動、バランスのとれた生活。(2)スポーツ嫌いの子どもを作らないためのしくみ、環境づくり。(3)指導者の社会的責任のある活動等を進めるために、実技研修と合わせて医学的な面、スポーツ指導論などの自己研鑽が必要ではないかと提言されている。茶の花の表紙絵もまた美しい。

○福、徳、貧乏、幸い

門田 保慶(福岡市城南区)

元朝日新聞の文化部で活躍された小林慎也さんのコーチで、文章教室で御勉強、その成果でまとめられた自分史手帖といえる一冊。標題に掲げられた「福、徳、貧乏、幸い」の文をここに紹介すると――
「子供の数え唄あそびに「福、徳、貧乏、幸い、金持ち、親方」というのがあって子供たちは、めいめいの着物の袖口をめくっては着ている着物から肌着までの枚数を数えながら「俺は貧乏だ!」「俺は幸いだ!」と囃したてて遊んだものだ。昭和17年代、大分県の草深い豊後の山里で話である。もしやと家人に聞いてみると、福岡地方では聞いた験しがないという。郷里の同級生に訊いたところ、竹田市でも、そんな数え唄は初耳という。」文の結びに門田さんは彼岸への旅立ちの衣裳は経帷子一枚。公平な「福」の形かもしれないと。

○句集 寒垢離

大賀 良子

立春やすこし南に北斗星
連山の茜に染まる二月かな
牙返るいよいよ分怒の不動尊
春めきて子の影法師弾みあし
花杉やからす天狗の一本歯
春風や順番を待つすべり台
たんぼぼに囲まれている芙美子の碑

―俳誌「ばあこうとシリーズ」第五集―

・大正15年朝倉生まれ
高浜虚子に学ぶホトトギス系の俳人
福岡文化連盟理事 福岡市在住

編集掌記

▼一枚ひらひら柳葉魚を想わせるような自分史図書館だより『ya』49号。そのつぎは50号。これは少々奮発、記念号を企画したい。これには皆さま、生涯の愛読書特集を試みたい。読者の皆さま、ご遠慮なく「館」また「館」長宅〒834-1402・椎窓猛宛、3月下旬あたりまでにお寄せください。本一冊、その書名、動機、いきさつまでも記していただきましたら有難く存じます。▼芸芸誌『季刊文科』43号に『神聖喜劇』の大作で知られる作家大西巨人氏の「若山牧水のうた」と題した随筆が眼にとまった。大西さんは戦時中、召集され、対馬要塞重砲兵として、四年間、勤めていた。

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
貸し出しはしていません。

〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

沖合を眺めては、牧水の歌を口誦していたという。”春白昼この港によりもせず岬を過ぎて行く船のあり“のちに山と山に分かれた兵と手旗信号で、牧水のうたを交信、楽しんだとの話。”日向の国むら立つ山のひと山に住む母恋し秋晴の日や“
(自分史図書館長 椎窓猛)